

私の太宰

その魅力

東京の中央線沿線に住んでいる中年作家を主人公とした一連の作品群を目にして、太宰治を私小説の作家と思ひこんではならない。太宰は決して私小説の作家ではない。

もしそうだったとしたら、太宰は、あの初期のいくつかの作品に見られる、自意識にがんじがらめにしてばられて、やや息苦しくなるような自己中心の作風から抜けだせず、一部に熱烈でマニアックなファンは得たにせよ、今日のように多くの若者男女の読者を獲得することはできなかったにちがいない。

まれに見る天賦の才の持ち主であることは確かだが、その太宰も、デビュー以降、やはりプロフェッショナル

ヨナルの作家に大きく変ぼうしていったのである。

From. 田澤拓也さん(5)

「ルド」が確立されていたのだと思う。その「太宰ワールド」には、もちろんいくつもの特徴があるけれど、ここでは端的に、太宰十八番の一人称告白体、それも十代の女学生の告白体でつづられた「女生徒」を例にとる。

主人公の女学生は、大人になるまでの「長い厭(いや)な期間」をどう暮らしたらよいか、大人は誰も教えてくれないと思いをめぐらす。その主人公に太宰は、こう語る。〈現在こんな烈しい腹痛を起しているのに、その腹痛に対しては、見て見ぬふりをして、ただ、さあさあ、もう少しのがまんだ、あの山の頂上まで行けば、しめたものだ、とただ、そのことばかり教えている。きくと、誰かが間違っている。わるいのは、あなただ。〉(引用は新かな遣い。以下同じ)

一人称告白体で手応え

カット・津島園子



いべつ)してあげる。いやだ。私は、このままおかわれしたい(略)。私の傍にいてもいけない。ああ、もっと、もっと広い家が欲しい。一生遠くはなれた部屋で暮らしたい。結婚しなければ、よかった。二十八まで、生きていなければよかったのだ。)

フツ、たかが吹き出物でここまでいうか？だが、こう書かれると、やはり読者は他人(ひと)ことではいられなくなってくる。否心(いやおう)なしに話者(作者)は読者を「I」と「YOU」の関係に引きずりこんでいく。

こうして太宰は、開高健流にいうなら、まさに「野原を断崖(だんがい)のよう」に歩く「絶妙の語り」の手法を身につけていったのである。

(ノンフィクション作家)

それこそ読者は苦笑せざるを得ないが、太宰は、この小説を機に女性告白体(手応え)を得たらしい。ほとんど「皮膚と心」「誰も知らぬ」など同じ手法の作品を

発表していく。その「皮膚と心」では、体に吹き出物ができた若妻に、こんな言葉をいわせる。「こんなあなたを、まだいたわるなら

ば、私は、あの人を軽蔑(け